

被爆者の証言を映像に残し、戦争の悲惨さを伝えていく山岡さん。最も若い被爆者である胎内被爆者としての思いを聞きました。

妊娠8カ月の母は

私の家族は広島市内、爆心地から3・5キロの江波本町に住んでいました。父と母、3人の姉と兄が2人いて、当時母は妊娠8カ月でした。私は被爆者としては最も若い胎内被爆者です。

1945年8月6日、その朝、中学生だったすぐ上の兄は夏休みなので、建物疎開の学徒動員に行くのを嫌がっていました。それでも無理に行かせて、兄は爆心地から

〈19〉 最も若い被爆者として、ありのままを伝えたい



福井県大野市 山岡直文さん(70)に聞く

胎内被爆者として、家族から聞いた体験を語り継ぐ山岡さん

被爆の恐怖は一生

500人のところで350人の生徒と一緒に被爆しました。ほぼ全員が亡くなりましたが、生き残った同級生が、顔を大きく腫らせて、わが家知らせてくれました。

父と伯父が捜しに行く

と、本川沿いや川の中にはたくさん死傷者がいました。被爆した遺体を一人ひとり捜していったそうです。兄はうつ伏せになっていたの、胸の名札とスポンのベルトのバックルが目印になり見つけることができました。父は兄の遺体を戸板の上に乗せて行きました。身重の母も心配し、後から捜しに行きました。途中で兄を運ぶ父たちと会ったそうです。その時の母の気持ちは聞けていません。

それから2カ月後、私は生まれました。私は亡くなった兄とそっくりだったので、母は兄の生まれ変わりと思ったのでしょ、自分を見て癒されていたそうです。

父と伯父が捜しに行く

と、本川沿いや川の中にはたくさん死傷者がいました。被爆した遺体を一人ひとり捜していったそうです。兄はうつ伏せになっていたの、胸の名札とスポンのベルトのバックルが目印になり見つけることができました。父は兄の遺体を戸板の上に乗せて行きました。身重の母も心配し、後から捜しに行きました。途中で兄を運ぶ父たちと会ったそうです。その時の母の気持ちは聞けていません。

それから2カ月後、私は生まれました。私は亡くなった兄とそっくりだったので、母は兄の生まれ変わりと思ったのでしょ、自分を見て癒されていたそうです。

父と伯父が捜しに行く

と、本川沿いや川の中にはたくさん死傷者がいました。被爆した遺体を一人ひとり捜していったそうです。兄はうつ伏せになっていたの、胸の名札とスポンのベルトのバックルが目印になり見つけることができました。父は兄の遺体を戸板の上に乗せて行きました。身重の母も心配し、後から捜しに行きました。途中で兄を運ぶ父たちと会ったそうです。その時の母の気持ちは聞けていません。

いま伝えたい ——被爆者から



「語り部」となって

広島で結婚し、その後

妻の両親がいる福井県大野市へ移り住みました。いままで年に2回行われる被爆者向けの定期健康診断には行っていました。5年前、福井の被爆者団体協議会「すいせん会」の会長さん(当時)が、県内の被爆者と交流するためにその検診にきました。会長と話して私は初めて「すいせん会」のことを知り、お役に立てればと入会しました。

「語り部」となって

広島で結婚し、その後

広島で結婚し、その後

広島で結婚し、その後

広島で結婚し、その後